




## 審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1231 号	氏名	森田 敏夫
審査担当者	主査	鳥村 拓司	
	副主査	山本 宏一	
	副主査	奥田 康司	
主論文題目：			
<b>Long-Term Outcomes of Pancreatic Function Following Pancreatic Trauma</b> (外傷性膵損傷の特徴からみた膵機能の長期予後)			
審査結果の要旨 (意見)			

交通事故などによる外傷性膵損傷は、膵切除など侵襲の強い治療法が選択され長期予後や後期合併症による Quality of life の低下など様々な問題点を抱えている。しかし、発生頻度が低く今まで長期的経過を追った報告はほとんどなかった。今回の研究は、36 年前からの症例を掘り起し、膵切除の有無と合併症の関係、および糖尿病の発症への影響について検討し症例数が少ないなか膵切除例の方が下痢や糖尿病を発症しやすい可能性を明らかとした。本研究の結果は、今後実際の臨床においても外傷性膵損傷の症例の長期的な経過観察および加療において極めて有用と評価できる。

審査に当たり、今後の展開、また研究内容に対する質問にも著者からの確かな回答が得られた。よって、この論文は十分に学位に値するものと考えられた。

### 論文要旨

【背景】外傷性膵損傷の発生頻度は非常に稀である。このため長期予後、特に内分泌機能や外分泌機能に関する報告は極めて少ない。今回、我々は自験例の後方視的検討から、外傷性膵損傷の長期予後と遠隔期合併症を明らかにすることを目的とした。【方法】1981 年から 2012 年までに、久留米大学病院高度救命救急センターに搬入された膵損傷患者で生存退院し、本研究への参加に同意を得られた 14 名に対し、診療録より診断名、患者情報、受傷概要、治療内容、合併症、入院期間を抽出し、調査時の膵機能を評価するためにアンケートと血液検査を行った。その結果を、膵切除術群 (以下、PT 群) と非膵切除術群 (以下、non-PT 群) の 2 群間で比較検討した。【結果】男性が 10 例で調査時年齢の中央値は 49 歳で、受傷からの経過期間は 23 年 5 ヶ月であった。治療内容は 6 例が PT 群 (膵体尾部切除術 5 例、膵頭十二指腸切除術 1 例) で、8 例が non-PT 群 (膵単純修復術 4 例、開腹ドレナージのみ 2 例、保存的加療 2 例) であった。受傷後に糖尿病が新規発症した症例は、PT 群は 3 例 (50%) であるのに対し non-PT 群は 2 例 (25%) で内分泌機能不全と判断した。発症年齢をみると、PT 群は 28 歳、35 歳、40 歳であるのに対し、non-PT 群は 50 歳、60 歳であり、1 例を除いて受傷後 15 年以上経過した後に発症していた。脂肪分摂取後に増悪する下痢を認める症例は、PT 群は 3 例 (50%) であるのに対し non-PT 群は 1 例 (12.5%) で外分泌機能不全と判断した。いずれも PT 群が多かったが、統計学的に有意差は認めなかった。【結語】手術症例においては退院後に発症する可能性があり、長期の経過観察が必要と考えられた。また、膵切除を行うと糖尿病の発症を若年化させる可能性があることに留意して、外傷性膵損傷に対する治療方針を決定すべきである。